

『天草本平家物語』

新

村出 序並閲、龜井高孝 翻字『天草本平家物語』（岩波書店 1927. 6. 28）
※（※）は原文まま、（註…）と赤太字は引用者

第十 院宣によつて豊後の緒方平家に對し謀叛を起すによつて、平家あつかはるれどもかなはず、遂に太宰の府にも得たまらいで、徒歩はだしで落ちさまよはれた事と、八島の内裏造の事。

右馬。 してそれはそのやうに自由にして西國には何としてゐられたぞ？

京からの咎めはなかつたか？

喜。 そのお事ぢや。さう／＼せらるゝ内に豊後國に代官の心になつてゐられた頼もり「マ、」といふ人の所へ、京から御使が立つて、「平家は天道にも離され、君にも捨てられまらして、都を出て浪の上に落人となつてたゞよふを鎮西の者共がうけとつてもてなすこそ聞えぬ事なれ。早々そこもとの者みな一味して平家を亡せ。」と仰せられたによつて、頼經これをその國の緒

方（註…三郎惟栄）といふ者に下知せられたれば、やがて院宣ぢやというて、九州二島へ文を廻いて、よい武士共を集むるに、みな一味した事は、まことにこれは平家の運のつきた謂れでござる。平家はいま國を定めて西國に又内裏を造らうと沙汰せられたれども、緒方が謀叛と聞えたれば、「何とせうぞ。」というて、騒ぎ合はれた所で、時忠卿といふ人申されたは、「かの緒方は小松殿の御被官（ごひくわん*原文「御被管」）ぢやほどに、その子達のうちから一人豊後へ遣りまらして、何卒（なんとぞ）とゝのへてごらうぜられい。」

といはれたれば、「げにもぢや。」とあつて、資盛の卿五百餘騎で豊後國へ打越えて、さま／＼にとゝのへられたれども、**緒方**は一切同心せいで、あまつさへ此の資盛をもそこで討果しさうに（*推定・伝聞「さうな」）あつたれども、「大事の中には小事なしと、いらぬ事ぢや。取籠めまらせずとも、何程の事をか召されう。たゞとう／＼太宰の府へ歸らせられて、一所でともかうもならせられい。」というて、情なう追ひかへいて、我がおとうと「マ、註・次男」の**野尻**（註・次郎惟村）といふ者を使にして、太宰の府へ申し遣つたは、「平家は重恩の君でござれば兜を脱いで、弓の弦をはづし、降參仕らうずる事なれども、都からの御錠には、「疾う疾う追出しまらせい。」とござるによつて、そこをとう出させられい。」と申送つたれば、時忠卿出會うていろ／＼すかいて、「頼朝や木曾に一味したならば、國を預けう、郡を呉れうなどゝいふを眞實かと思つて、その豊後の國司頼經がいふ事に同心しては悪しからうぞ。」といはれたれば、**野尻**歸つてこの由を父（*緒方維義）に云うたれば、「それならば急いで追出せ。」というて、軍勢を催すと聞えたらば、平家の侍頼貞（*ママ。源季貞か。）、守澄（*ママ。平盛澄か。）などはこれを召捕つて死罪に行はうというて、三千餘騎で筑後國たけのした「マ、」の庄といふ所へ發向して、一日一夜攻め戦ふ所で、**緒方**三萬餘騎で寄すると聞えたれば、取るものも取りあへず、太宰の府へ平家の侍共は皆落ちてかへられたが、そこにもえたまらいで主上をば輿に召させ、國母をはじめめてやごとなない女房達、袴のそばをとり、宗盛なども狩衣のそばを高う挿（さ

しはさ)うで、我先きにと徒歩跣で落ちさせらるゝに、折節雨がふつて車軸を流せば、吹く風は砂(いさご)を飛ばして、目口に入れば、落つる涙と降る雨はいづれをいづれと見別けられなんだ。嶮しい所どもを歩かせらるゝ事をばいつ習はせられうぞなれば、御足から流るゝ血は砂を染めて、そのあはれな態は言語にのべられぬ態でござつた。

さうしてやう／＼と山鹿(やまじか) 註…やまが)といふ城へ入らせられたれども、そこへも尚敵が寄すると聞えたれば、小舟どもに取乗つて、よもすがら豊前國の柳浦(やないうら) 註…やなぎがうら)へお渡りあつたが、そこにも又えたまらいで、あそこゝへ漂ひ歩かるゝうちに、小松殿の三番目の子の清しげ「マ、」(*平清経)といふ人は平家の運のつきはてた態を見限つて、「網にかゝつた魚のやうにしてゐてはいらぬ事ぢや。」と思はれたか、月夜に心を澄まいて、船の屋形に立出(たていで)て笛などを吹いて遊ぶ態にもてないで、海へざつと沈んで死なれたれば、男女泣き悲しうだれども甲斐もおりなかつた。その分にして平家は重能といふ者をたのうで四國の地へ渡られたが、そこで重能が才覺をおもつて「マ、」四國の國中(くにうち)を催いて、讃岐の八島にかたの如くな板屋に内裏や御所をつくらせた。其の間は百姓の家をばさすがに皇居にする事がならんだれば、船を御所に定められたれば、宗盛を初め、皆あまたの苦屋に日を送り、夜を重ねて、浪の上に漂はるれば、少しの間も心靜かな事はなうて、深い憂ひに沈んで、霜のおほふあしの枯葉を見ては、命の脆い事に思ひなし、洲崎にさわぐ千鳥の

聲をきいては、曉のうれひをまし、そばにひきかくる楫の音は夜半に心を傷ましめ、白鷺の遠（をち）の松に群居るを見ては、源氏の旗をあぐるかと疑ひ、夜雁のなくをきいては、敵の船を漕ぐ音かと驚き、寒い潮風に揉まれるば、姿形も漸々（ぜんぜん）に衰へて、命を長らへられうずるやうもないほどにござつた。

（略）